

第20回 平城京展

平城京に眠る 弥生文化



あ い さ つ

奈良市では、奈良時代の都であった平城京跡を中心に埋蔵文化財の発掘調査を行っております。調査では、古代の人々の暮らしを理解するのに重要な遺構や遺物が見つかります。この埋蔵文化財を活かし、少しでも歴史に触れていただくため平城京展を開催いたします。

今回の展示は、「平城京に眠る弥生文化」を主題に企画いたしました。ここ数年、平城京の調査が進むにつれて奈良時代の遺構とともに、さらに古い時代の遺構が見つかっています。特に近年、弥生時代の遺構、遺物が見つかっており、この展示を通して弥生時代の遺跡の様子や生活文化について理解を深めていただければ幸いです。

平成15年2月1日

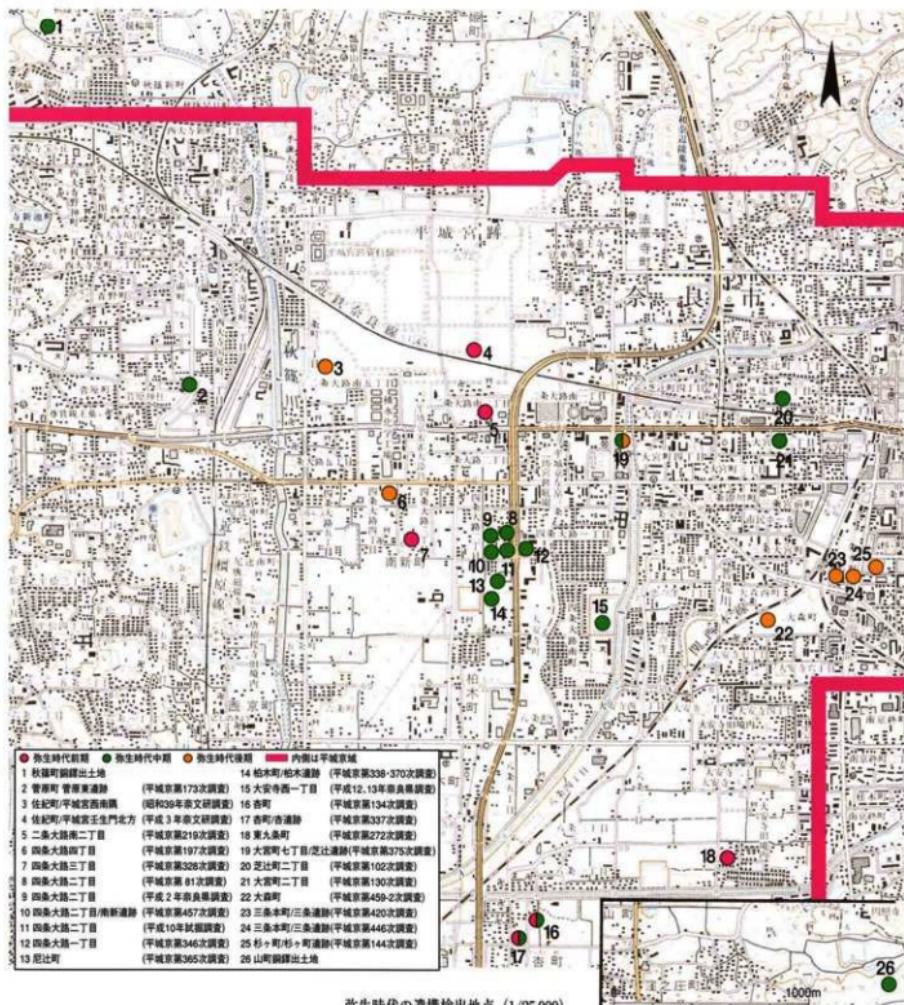
奈良市教育委員会
教育長 冷水毅

例　　言

1. 本書は、平成15年2月1日～平成15年3月31日まで奈良市埋蔵文化財調査センター展示室で、開催の第20回平城京展「平城京に眠る弥生文化」に際して作成した展示解説パンフレットです。
2. 本展の展示物の出展にあたり、東京国立博物館、奈良国立博物館、大阪府立弥生文化博物館のご協力をいただきました。記して感謝いたします。
3. 本書の編集・レイアウトは、奈良市埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て秋山成人が担当しました。

I 奈良市の弥生遺跡

奈良盆地の弥生遺跡は、唐古・鍵遺跡など盆地南部に多く点在していることが知られていましたが、奈良市を含む盆地北部中央では弥生遺跡(集落)の存在があまり明らかになっていませんでした。これまで奈良市内の弥生遺跡は平城京城外の六条山遺跡、望之庄遺跡、秋篠町銅鐸出土地、山町銅鐸出土地などが知られており、京城内の弥生遺跡は多くは知られていませんが、奈良市が昭和54年から発掘調査を本格的に開始してから平城京城の地下に眠っていた弥生遺跡も徐々に分かるようになってきました。



弥生時代の遺構検出地点 (1/25,000)

Ⅱ 弥生文化と集落の立地

弥生文化は、紀元前300年頃に大陸から伝わった稻作農耕や鉄・青銅器の道具を使う新しい技術により生まれた文化です。新しい技術で、青銅製の武器や銅鐸・鏡、農具として鋤や鍬、堅杵が作られ、工具として磨製石器が使われました。土器には、甕や鉢以外に米を貯蔵する壺が現れます。弥生時代になると縄文時代の狩猟採取を中心とした生活から、低地に水田を築高地に大きな集落と墓をつくる定住生活になります。稻作農業により安定した食糧が得られるようになると余剰な生産物が生まれ集落を治める有力者に富が集まるようになります。そうしたことが弥生時代の建物の大きさ・配置や墓の大きさ・副葬品から分かります。弥生時代の終わり頃になると「魏志倭人伝」の記録から、卑弥呼のような権力をもった王が現れたことが窺われます。

こうした人々が生活する集落は、大きな河川の周辺に立地していることが多い、奈良市では発掘調査により秋篠川、佐保川、菩提川の旧河川が見つかっています。

河川 農耕用の灌漑水源として利用され
導水施設や当時の人々の物資運搬手段として
も利用されていたようです。

平城京第420次調査では、東から西へ流れ
る幅6.5m、深さ0.6mの河川跡を検出してい
ます。河川跡から弥生時代後期の弥生土器
壺・甕・鉢、木製品などが出土しました。

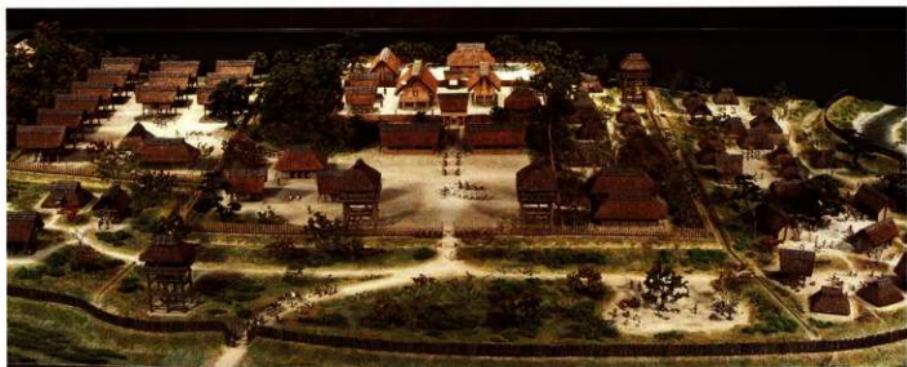
平城京第446次調査では、北東から南西に
流れる幅26mの河川跡を検出しています。河
川跡から弥生時代後期末の絵・記号が描かれ
た弥生土器壺・器台・甕・高杯、堅杵・鋤の
木製品がまとまって出土しました。

この二つの河川跡(P4遺構位置図参照)は、
一連のもので春日野丘陵をほぼ東から西へ流
れると考えられます。



河川 三条本町/三条遺跡（第420次）

三條
五種類



卑弥呼の都復元模型 大阪府立弥生文化博物館所蔵

Ⅲ 弥生時代の人々の暮らし

人々は、稲作に適した川の流域沿いに集まり村を作り、水田を耕し豊穣を願い暮していました。食物調達手段には、稲作以外に狩猟・採取・漁も行われています。山では、おもに猪・鹿を狩り、ドングリ・クルミなどを拾い、川では、アユ・フナ・タニシ・シジミなどを捕っていました。また、狩猟のための犬、家畜として豚を飼っていたようです。

1. 集落

弥生時代の集落は、主に水の利便性の高い低湿地や湧水する土地に作られた水田と、その周辺の微高地に設けられた居住域、少し離れたところに築かれた墓域からなります。集落には、環濠集落(濠を廻らした集落)の他、高地性集落(高い丘陵上や山頂、山の中腹に営まれた集落)などがあります。環濠集落の大きさは、奈良県田原本町の唐古^{からこ}・鍵^{かぎ}遺跡で径約400m、大阪府和泉市の池上曾根遺跡で径約300mあります。集落内の構成は、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土坑からなります。高地性集落は、防御を目的とした集落と考えられています。墓には、方形周溝墓、土坑墓などあります。

溝 利用目的によりいくつかの用途に分けることが出来ます。集落の周りを囲む防御的に掘られた濠、建物を区画するための溝、建物に接し周間に掘られた排水溝、川から水田へ水を引き込むための灌漑用の水路などがあります。



溝 四条大路二丁目/南新遺跡（第457次）



溝 杏中町/杏遺跡（第327次）

図版二
/蘇謙

吉野/吉謙

平城京第457次調査では、北西から南東方向の幅2.9m、深さ1.1mの断面U字形の深い溝を検出しています。溝内から弥生時代中期の弥生土器壺・鉢の小片、石包丁・石鎌(矢の先)・石小刀・石斧・砥石などの石器が出土しました。この調査地の東側では平成10年に奈良市が試掘調査と平城京346次調査で同様の溝(P6遺構位置図参照)を検出しており一連のものと考えられます。北側では平成2年に奈良県が調査を行い竪穴住居、溝、土坑を検出、南側では柏木町(柏木遺跡)の方形周溝墓群が広がることから、この溝が居住域を囲み、墓域とを分ける濠と考えることができます。

平城京第337次調査では、北西から南東に延びる幅1.8m、深さ0.3mの溝を検出しています。溝内から弥生時代前中期から中期初めの弥生土器壺が出土しました。この溝は、深さが浅く、農耕用水路または、建物を区画する溝の可能性が考えられますが、周辺での発掘調査が進んでいないため、はっきりしたことには分かりません。

住居 弥生時代の住居の形態は、竪穴住居と掘立柱建物があります。竪穴住居は、縄文時代から続く住居の形で、地面を掘り下げ床面を作り、柱を立て屋根で覆った形をしています。竪穴住居の構造は、主柱で支えられた垂木を放射状に配した屋根の骨組みの上に茅や土などで葺かれていたようです。住居内は床面中央に炉が設けられ、周囲の壁沿いに湿気を防ぎ排水用と考えられる溝が廻らされているものもあります。弥生時代前期、中期に平面円形の住居が多く、弥生時代後期の終わり頃に平面方形の住居が現れます。



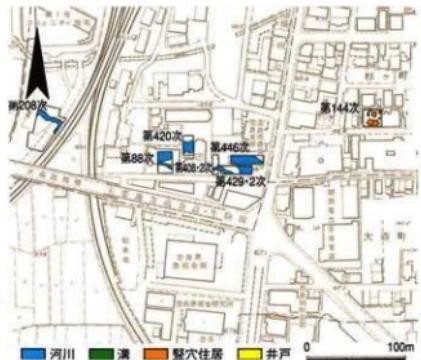
竪穴住居復原図（イメージ）

円形竪穴住居 平城京第197次調査では、径6.0～6.3m の平面円形の竪穴住居を検出しています。住居内は、柱間2.4m等間隔に柱穴が4ヶ所、壁沿いに幅0.1～0.2m、深さ0.1mの溝と中央には径1.1m、深さ0.4mの不整円形の土坑があり、弥生時代後期の弥生土器壺・甕・高杯・器台、石錐・石錐の石器が出土しました。



円形竪穴住居 四条大路四丁目（第197次）

方形竪穴住居 平城京第144次調査では、径約 5 m の平面隅丸方形の竪穴住居を 3 棟検出しています。柱穴は、4ヶ所あり壁沿いに溝が廻り中央に土坑があります。この内 1 棟には、住居から 2.5～3.5 m 外側に幅 0.4～0.9 m、深さ 0.1～0.3 m の溝が廻っていました。住居内からは弥生時代後期の弥生土器壺・甕などの小片が出土しました。



三条本町/三条道路・杉ヶ町/杉ヶ町道路 遺構位置図 (1/5,000)



方形竪穴住居 杉ヶ町/杉ヶ町道路（第144次）

井戸 農耕文化が伝わる以前、飲料水は河川や泉から得ていましたが、井戸を掘削することで、水の確保が容易になりました。井戸は、地下の湧水層まで掘込まれ、素掘りのもの・木の枠を設けたものがあります。

土坑 地面に穴を掘っただけの遺構です。用途は、食物などの貯蔵するためや廃棄物を埋めるためなどです。また土坑には、素掘りの井戸と区別しにくいものがあります。

平城京第144次調査検出の堅穴住居の外側約3mに、径約1.1m、深さ1.2mの土坑を検出しています。土坑内から弥生時代後期末の弥生土器壺・鉢・高杯・器台、植物の種子が出土しました。

平城京第459-2次調査では、径0.7~0.8m深さ0.95mの平面楕円形の土坑を検出しています。土坑内から祭祀に使用されたと考えられる弥生時代後期の弥生土器壺9個・ミニチュア高杯、鋤の木製品が出土しました。

平城京第219次調査では、径2.4m~1.65m深さ0.92mの平面楕円形の土坑を検出しています。土坑内から弥生時代前期の弥生土器壺・甕・木製高杯・堅杵・櫛の木製品、敲石の石器が出土しました。

この3つの土坑は、湧水層まで掘込まれていることから素掘りの井戸とも考えられます。

平城京第81次調査では、径1~3m、深さ0.49~1mの平面不整形な土坑を検出しています。土坑内から弥生時代中期の弥生土器壺・高杯・石包丁・石斧の石器が出土しました。調査地南側で、平成2年に奈良県が堅穴住居5棟を検出しており同じ集落内の遺構と考えられます。

平城京第134次調査では、径1.4~3.4m、深さ0.1~1.0mの平面不整形な土坑を8基検出しています。土坑内から弥生時代前期から中期初めの弥生土器壺が出土しました。

平城京第272次調査では、東西3m、南北1.8m、深さ1.1mの平面隅丸方形の土坑を検出しています。土坑内から弥生時代前期の弥生土器壺・蓋・鉢が出土しました。



土坑内土器出土状況 大森町（第459-2次）



土坑群 杏町（第134次）



土坑出土土器 二条大路南二丁目（第219次）東九条町（第272次）

墓 弥生時代の墓は、集落と離れた場所に築かれ、現世と死後の世界とが区別されていたことが窺えます。近畿地方の墓の形は方形に溝が掘られ、内側に盛土を築き棺を納めた方形周溝墓、地表に穴を掘っただけの土坑墓があります。棺には板を組合せた木棺と壺・鉢・甕を使った土器棺があります。

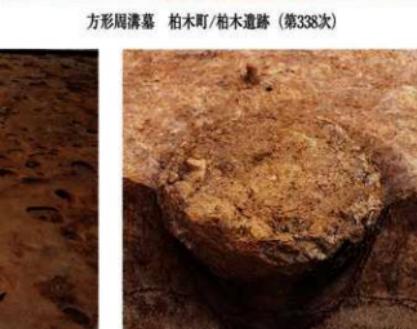
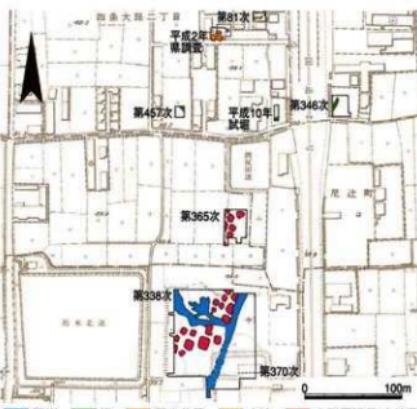
柏木/柏木跡

方形周溝墓 平城京第338・370次調査では、方形周溝墓18基を検出しています。方形周溝墓は、北東から南西方向に延びる河川跡の西側に分布し、さらに東西方向の河川跡を挟み、南北2群に分かれます。規模は一辺4～14mあります。4基の墓には組合せ式箱形木棺の小口板の痕跡が残っていました。小口板間の距離は1.2～1.6mあります。周溝から弥生時代中期の弥生土器壺・鉢が出土しました。

柏木
柏木跡

平城京第173次調査では、方形周溝墓5基を検出しています。大きさにより大小2群に分かれます。この内3基は、一辺5～6mで、他の2基は9～12mの規模があり、主軸は、やや北で西に振れています。周溝から弥生時代中期の弥生土器壺が出土しました。

土坑墓 平城京第338次調査では、胴部径約70cmの弥生時代中期の弥生土器甕とほぼ同じ大きさの掘形に甕を埋めた土坑墓を検出しています。上部は削られ、土器内に甕の口縁部と棺の蓋に利用した高杯の杯部が残っていました。



方形周溝墓 菅原町/菅原東遺跡 (第173次)

土器棺 柏木町/柏木遺跡 (第338次)

2. 農耕

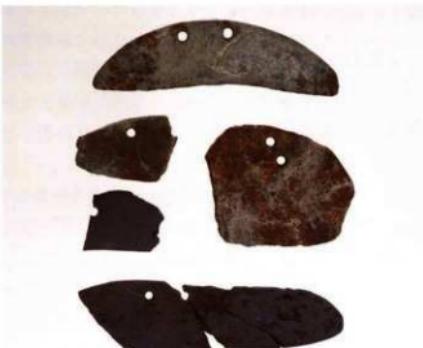
日本における稻作開始時期は、縄文時代晩期の北部九州や西日本各地の遺跡から水田や炭化米が見つかることから、縄文時代晩期に遡ることとなりました。奈良市において弥生時代の水田は見つかっていないものの水田に水を引くための施設である堰や耕作するための鉢・鋤、収穫するための石包丁、脱穀するための堅杵が出土していることから稻作が行われていたことが分かります。



堅杵出土状況 二条大路南二丁目（第219次）

堅杵 平城京第219次調査では、弥生時代前期の土坑から堅杵がほぼ完全な形で出土しました。全長は1.43mあります。握る部分は糸巻きの形をしています。つく部分の先端は一方が丸くすりこぎ状で、もう一方があまり使用されていなかったのか平坦です。堅杵は、脱穀(初穀をとり玄米にする)作業に使われたと考えられています。

石包丁 稲穂を摘み取るための道具です。近畿地方の石包丁は、長さ15cm程度で、半月形に石を磨き片側に刃を作り、石の中央から若干刃の反対よりに中指に入る程度の間をおいて2ヶ所に孔が開けられています。



石包丁 四条大路二丁目（第81次・第457次）芝辻町二丁目（第102次）

堰 平城京第375次調査では、北東から南西方向に延びる幅3.5~5m、深さ1~1.2mの弥生時代中期終わりから後期初頭の河川跡と川底に丸木と矢板を打込み、横木を架け小枝・木皮を使い隙間を塞いで設けられた堰を検出しました。堰は、水流を分岐させ灌漑用水を溝に通し水田に引込むための施設です。



堰 大宮町七丁目/芝辻遺跡（第375次）

堰と河川跡 大宮町七丁目/芝辻遺跡（第375次）

二条大路二丁目
出土堅杵

堅杵二丁目
芝辻二丁目
出土堅杵

大宮町七丁目
芝辻遺跡
出土堅杵



3. まつり

稻作は、自然条件に左右されます。不作の時は、食糧確保が困難となり苦しい生活をせざるをえませんでした。よって人々が、一番恐れていることは、自然の脅威です。この脅威を鎮めるため、まつりを行っていたようです。この様子は、銅鐸や土器の表面に描かれた当時の人・動物・道具などの絵から窺へます。

銅 鐸 銅鐸は、その内側に舌と呼ばれる棒をぶら下げ音をだす、まつりに使われた用具だと考えられています。銅鐸の表面には、鹿・鳥・昆虫・脱穀・狩猟・漁などの様子が描かれ、豊かな暮らしを表現したものと思われます。



銅鐸出土地 秋篠町字西山



銅鐸出土地 山町字早田

秋篠町字西山
出土

山町字早田
出土

平城京外の奈良市秋篠町の尾根上で弥生時代中期前半の外縁紐式袈裟襟樽文銅鐸2点・中期中頃の扁平紐式袈裟襟樽文銅鐸2点が出土しています。この内、外縁紐式袈裟襟樽文銅鐸1点（秋篠4号銅鐸）には、水鳥の絵が描かれています。

平城京外の奈良市山町の尾根北側斜面で、弥生時代中期初頭の外縁紐式流水文銅鐸が出土しています。銅鐸表面には流れる水が描かれ（伝）徳島県川内町櫻瀬出土銅鐸と同範囲関係にあります。

絵画土器 日常用具として使われた器ではなく、まつりに使われたと考えられます。土器の表面には、人・巫女・鹿・鳥・魚・昆虫・建物・漁などの様子が描かれ豊かな暮らしを表現したものと思われます。

記号文土器 弥生時代後期の壺の表面に記されていることが多く、製作者又は所有者の記号とする考え方や絵画が記号化したとする考え方などがあります。



絵画・記号文土器 大宮町七丁目/芝辻遺跡（第375次）



流水文銅鐸 山町字早田 奈良国立博物館所蔵

平城京第375次調査では、河川跡及び堰を検出しています。堰付近からは、弥生時代中期末から後期初頭の弥生土器壺・壺・高杯・器台が出土しています。壺には、爪の圧痕を三列に並べて、生きものを表現した絵が描かれています。また、壺には、刺突による記号文が二列に施されています。

平城京第446次調査では、河川から弥生時代後期末の弥生土器壺・器台・壺・高杯・堅杵・鑷の木製品が出土しています。この内壺2点には、絵画又は記号文が線刻され四本の直線で方形を表したものとS字文様を表したものがあります。



絵画・記号文土器 三条本町/三条遺跡（第446次）

おわりに

この展示は、弥生時代の集落を構成する遺構を種類ごとに解説しましたが、遺構の広がりや出土遺物の時期を合わせ考えると弥生時代の集落がいくつかあげられます。弥生時代前期の集落は、二条大路南二丁目（土坑）から佐紀町（平城宮壬生門北方において平成3年に奈良国立文化財研究所が調査を行ったところ堅穴住居・土坑を検出）にかけての地域があげられます。弥生時代中期の集落は、四条大路二丁目（溝・堅穴住居・土坑）から柏木町（方形周溝墓・土坑墓・河川）にかけての地域があげられます。弥生時代後期の集落は、杉ヶ町（溝・堅穴住居・井戸）から三条本町（土坑・河川）にかけての地域や佐紀町（平城宮の西南隅において昭和39年に奈良国立文化財研究所が調査を行ったところ溝・堅穴住居・土坑・方形周溝墓を検出）周辺の地域があげられます。その他の地点でも遺構を検出しており、集落が存在すると思われますが、溝（濠）住居、土坑、墓などの集落を構成する遺構が揃っていないため、はっきりしたことは分かりません。今後調査が進み資料の増加により明らかになるものと思われます。

参考文献

奈良国立文化財研究所	『昭和39年度平城宮跡発掘調査概要』	1965
奈良市史編集審議会	『奈良市史 考古編』	吉川弘文館 1968
佐原眞・金閔恕編	『稻作の始まり』 『古代史発掘4』	講談社 1975
金閔恕・佐原眞編	『弥生文化の研究』全10巻	雄山閣 1986~1989
下条信行編	『弥生農村の誕生』 『弥生農村の誕生4』	講談社 1988
奈良市教育委員会	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和62年度~平成12年度』	1986~2002
奈良県教育委員会	『奈良県遺跡調査概報 1990年度（第1分冊）』	1991
大和弥生文化の会	『みずほ 第15号 研究集会記念号』	1995
大和弥生文化の会	『大和の弥生遺跡 基礎資料I』	1995
弥生都市は語る展実行委員会	『弥生都市は語る 環濠からのメッセージ』	2001
宮本長二郎	『日本の美術 5 No.420 原始・古代住居の復元』	至文堂 2001
大阪府立弥生文化博物館	『王の居館を探る』	2002



堅杵 二条大路南二丁目（第219次）

第20回平城京展 編集 奈良市埋蔵文化財調査センター
平城京に眠る弥生文化 発行 奈良市教育委員会
発行日 平成15年2月1日 印刷 奈良井眞美館